

# 七尾市大野木タキシロ遺跡

県道鶉浦～庵線改良工事に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1974・3

石川県教育委員会

## 例 言

I 本書は県道鵜浦～庵線改良工事作業に係る埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書である。

II 調査期間 昭和48年5月20日～7月2日

III 調査団 団長 高堀 勝喜（石川考古学研究会々長）

調査員 浜岡賢太郎（石川考古学研究会代表幹事）

加富 栄吉（石川県考古学研究会々員）

唐川 明史（ ” ）

西野 秀和（ ” ）

田川 捷一（七尾市史編纂専門委員）

松浦 五郎（七尾市史編纂室長）

桜井 憲弘（七尾市教委社教職員）

橋本 澄夫（県教委文化財保護課係長）

平田 天秋（県教委文化財保護課主事）

幹事 河崎与志雄（ ” ）

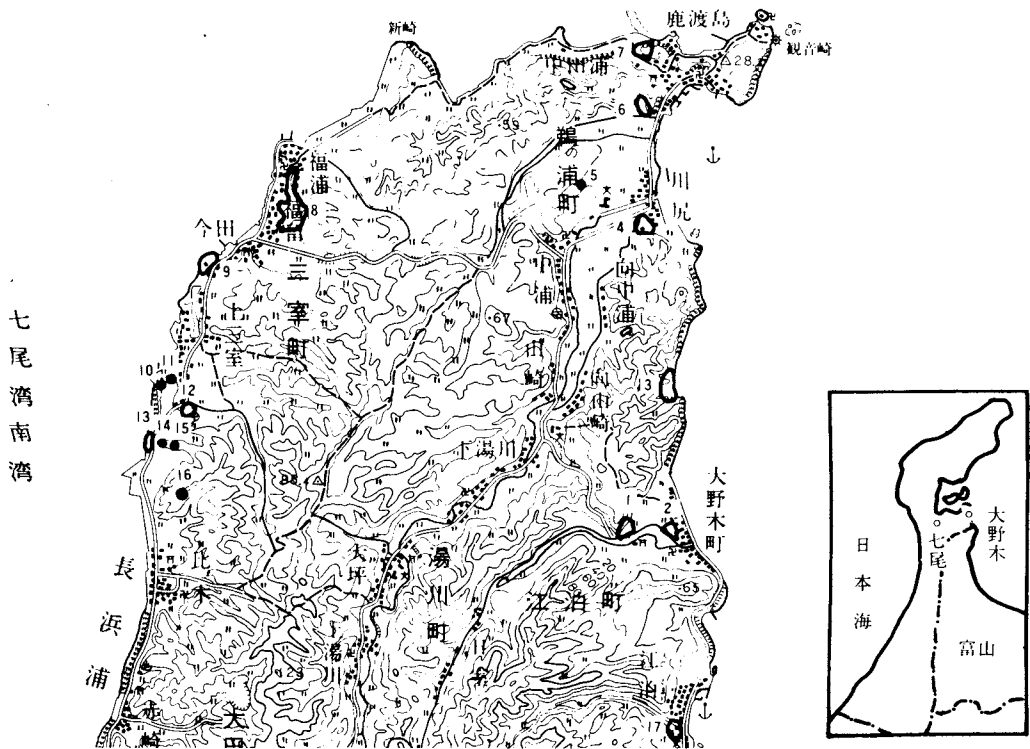
協力者 七尾市教委・七尾市史編纂室・大野木町有志・KK巻組

IV 本書の写真撮影・図版作成・原稿執筆および編集は橋本澄夫と平田天秋が担当した。

# 七尾市大野木タキシロ遺跡

## I 位置と環境

本遺跡は、石川県七尾市大野木町ハ部3-1 他通称タキシロ地内に所在する。この地域は七尾北湾と富山湾を割するいわゆる崎山半島の東岸地域（灘浦地区）にあたる。富山湾に面するこの辺り一帯は、低小な丘陵地形からなり、山間部より海へ流れる小河川によって形成された狭小な扇状地形にのぞんで集落が点在している。大野木町もまた日本海の荒波を直受する海岸線に沿って町並みを形成しており、その背後の山地との間に存在する狭い平地と、山地部との境界線近くには本遺跡の中心部が所在するものとみられる。遺跡の近くには宮の前川と呼ばれる小河川が流れており、その左岸にあっている。なお、標高約8mを測る。



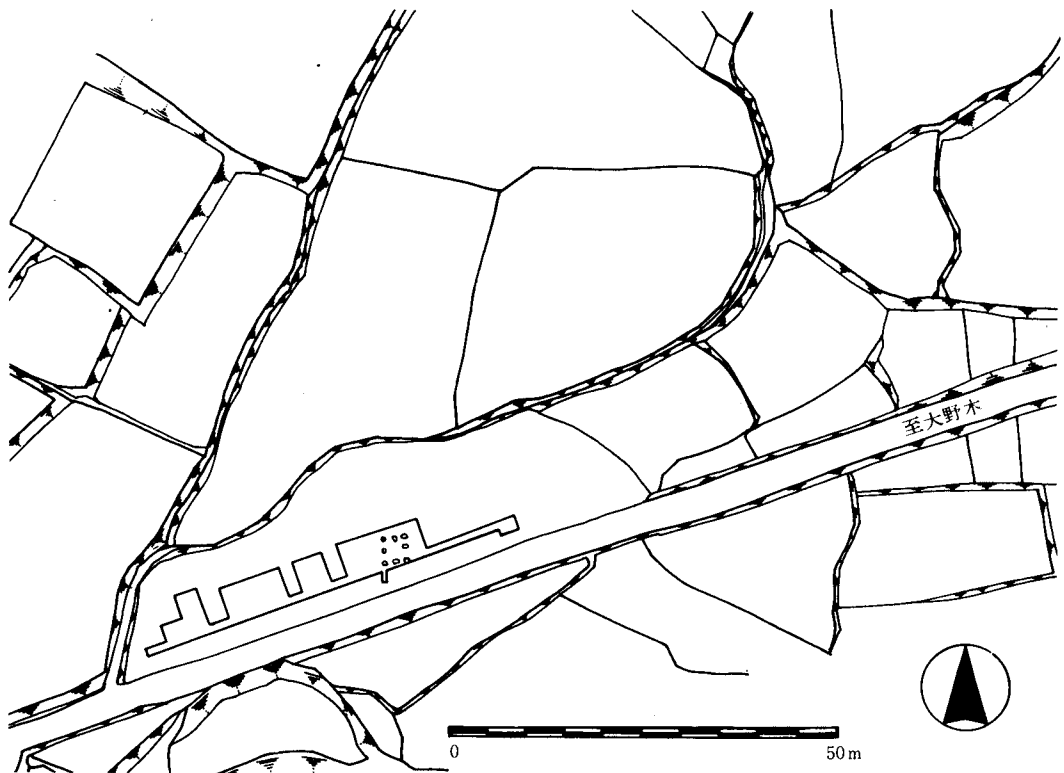
第1図 遺跡付近地形図（小口瀬口1:50,000）

- |             |               |               |          |
|-------------|---------------|---------------|----------|
| 1 大野木タキシロ遺跡 | 6 鹿渡島バス停裏遺跡   | 11 三室りきのみや2号墳 | 16 此ノ木遺跡 |
| 2 大野木製塩遺跡   | 7 鶴浦やちやま遺跡    | 12 三室おおたんぼ遺跡  | 17 江泊B遺跡 |
| 3 鶴浦馬捨場遺跡   | 8 三室福浦古墳      | 13 三室まどかけ遺跡   |          |
| 4 鶴浦くろさき遺跡  | 9 三室海岸遺跡      | 14 三室まどかけ1号古墳 |          |
| 5 鶴浦古墳      | 10 三室りきのみや1号墳 | 15 三室まどかけ2号古墳 |          |

さて、崎山半島の西沿岸（七尾北湾側）には三室古墳群を主とする後期群集墳が形成されているが、東沿岸（富山湾側）には古墳分布は十分に把握されていない。この地域に目立って分布する遺跡は、古墳時代後期から平安期にかけて営まれた土器製塩遺跡であり、大野木・江泊・白鳥・庵・佐々波地区に数多くの所在が確認されている。これら海浜集落の生産基盤は、製塩を中心とする海産業と自給程度の狭い耕地（「能登国公田数目録」によると、大呑庄一三拾九町二反〈建久八年〉）に頼る半農半漁民的生活だったと考えられる。なお、能登国衙跡・国分寺跡へは東北方約10kmで達するが、標高約300 m程度の山丘（石動山系）を越えねばならない。

## II 調査に至った原因と経過

本遺跡の発掘調査は、県道鶴浦～庵線の改良工事に伴うもので、昭和48年3月3日付けで県道路建設課より調査依頼があり、同年5・6月中2次に亘って発掘を実施したものである。野外調査の経緯は次の通りである。

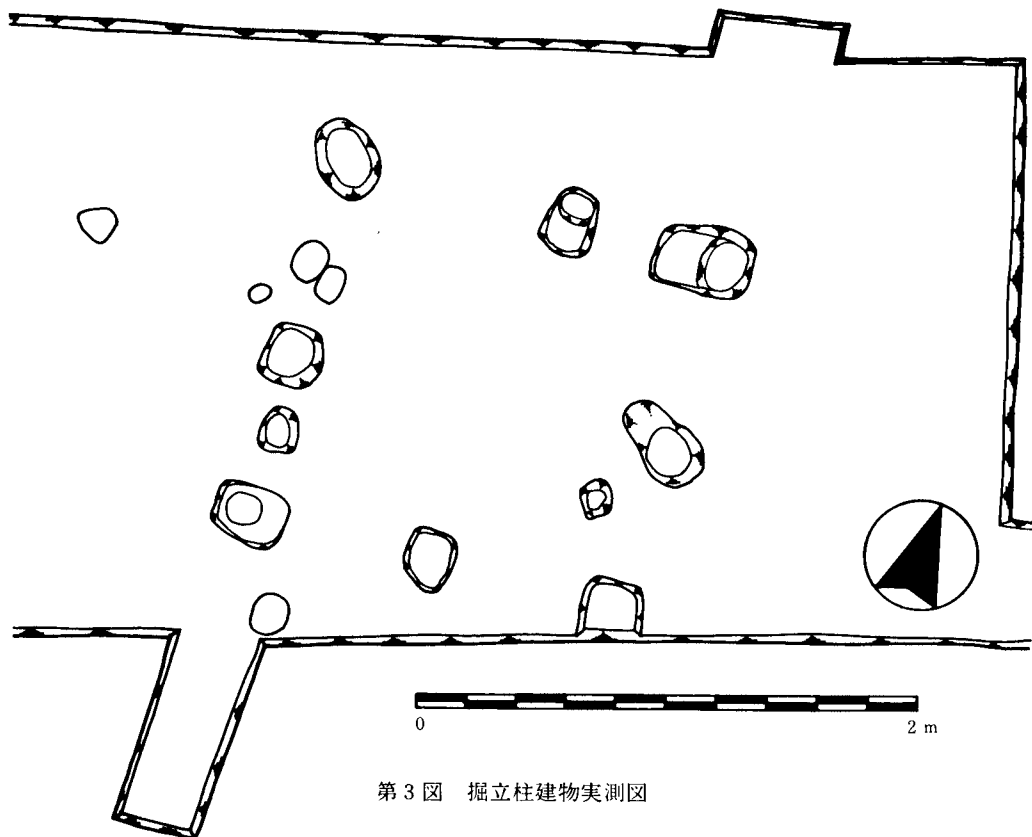


第2図 遺跡付近地形図

3月8日 現地視察（県文化室係長橋本・県七尾土木事務所職員・七尾市教委職員）。遺物散布状態の表面観察と地形観察により遺跡範囲をほぼ掌握。

- 5月21日 第一次発掘調査開始。1 m×30mのトレンチを設定。
- 5月22日 発掘作業開始。遺物包含層は薄いが、奈良・平安時代に属する須恵器・土師器の外、縄文土器片を含むことが判明。
- 6月25日 第二次発掘調査開始。調査員打合せ（出席者－浜岡・田川・松浦・平田各団員）。器材搬入。
- 6月26日 第一次調査で設定したトレンチでの所見に基づき、東側寄りに拡張区を設ける。掘立柱痕の一部を検出、その上面より緑釉陶器小片1点を検出。なお、トレンチ両端部においても再確認調査を行ったところ、地山（砂質層）上面より縄文土器片若干の出土をみた。
- 6月28日 掘立柱建造物跡の検出作業を行う。
- 6月29日 建造物遺構は2間×2間の小屋舎であったことが判明。
- 6月30日 遺物取り上げ、遺構実測。
- 7月1日 器材および出土品等搬出。

### III 遺 構



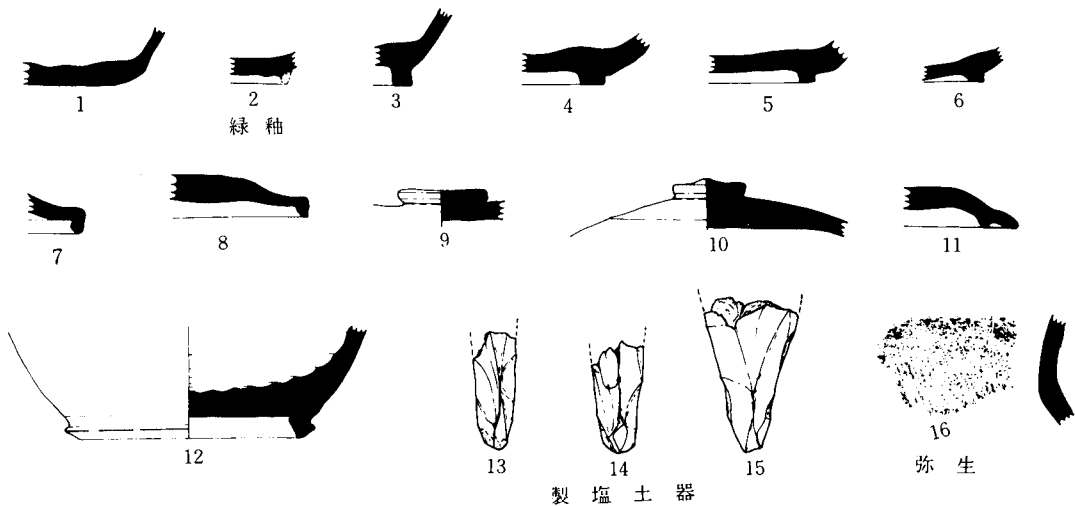
本遺跡で発見された遺構としては、2×2間(3.0×3.0m - N4.0° W-)規模の掘立柱建造物跡が唯一のものであった。

掘立柱掘り込み面では、ある程度の基礎地均しを行っているようであるが、土層断面図に表わすことのできる程度のものではなかった。柱根は全く遺存しなかったが、柱痕跡は径28~30cmを測った。柱の据付掘方は、規則的ではないが、50×80cm程度の方角をなすものが多いようである。第4図1の須恵器坏身片は据付掘方からの出土であり、同2の緑釉陶片は柱穴上面で検出されている。

#### IV 出土遺物

##### ① 須恵器・土師器(第4図2を除く1~12)

いずれも細片で、全形を復原できるようなものはなかった。台付塚はすべて貼付高台で、坏蓋も10・11のようにやや古相を呈するものと、7~9のように新しい形式のものまで含んでいる。土師器も図化できるものはなかったが、中に底部の切り離し手法として糸切り技法によったことが判る資料1点があった。



第4図 出土遺物実測図

##### ② 緑釉陶器片(第4図2)

塚形の底部で、キメの細かい胎土で土師質器面に淡い緑色釉薬をかけている。内面および外面はもとより、底部外面(裏部)にまで施釉している。なお、高台は貼付け手法によっている。

##### ③ 青磁片

皿または塚類の細片である。磁器質の胎土焼成で、外面には巾1.2~3cm程度のヘラ削り痕をとどめ、暗緑色の釉を施している。



第5図 繩文式土器

④ 製塩土器（第4図13～15）

いずれも角状脚台付深鉢形製塩土器（橋本-C類）の底部であり、焼成もろく胎土も荒い砂粒を含む粗製品で、赤褐色を呈している。

⑤ 弥生式土器片（第4図16）

細片で全形を知りえないが、甕形土器と考えられる。胎土中には粗い砂粒を多く含む、内外面ともに櫛状器具により整形痕をとどめている。

⑥ 縄文式土器片（第5図）

1は口縁部より結束を有する単節斜縄文をほぼ縦位に施している。9・10は深鉢形土器の同一個体であるが、口縁部に近く二本の沈線を周らし、その間をやや左に傾むく長さ1cm程度の平行沈線文（木節）を施し装飾としている。さらに、この文様帯より下部は、右下りの単節斜縄文（R-L L）で埋めている。15は、底部断片であるが、粗い格子目状の圧痕が見られる。なお、1・2を除いて後期前半期に比定されるものようである。

## V 若干の所見

今回本遺跡で発掘した部分は、極めて限られた範囲のものであり、遺跡の全体像を知り得るほどの成果を期待することはできなかった。しかし、調査地点の周辺には、縄文・弥生期さらに奈良・平安期に亘る包含地が複合しており、なかでも平安期には小規模ながら掘立柱建造物も存在したことが明かにされた。

本遺跡を特徴づけるものは上述の建造物跡と緑釉陶片の検出にあるといえる。しかし、検出した遺構面の直上までは、古い開田・耕地整理のために攪乱されており、建造物建築に際しては若干の地均しを行っているらしいものの、原状を十分に保っているとはし難い。

現在、崎山半島東側沿岸（灘浦地区）には、狭小な扇状地形を占めて形成された多くの小集落が点在しているが、水田など農耕に適する地域は非常に限定されていると言わねばならない。したがって、製塩など前面にひろがる海の幸と深い関係をもつ生産基盤を想定せねばならない。

本遺跡から1片の緑釉陶片が採集されている。緑釉陶器は、全国約120個所で出土例が報ぜられているが、近年の激増している開発事業に伴う発掘により更に類例は増加しているものと想われる。出土遺跡としては、寺院跡が最も多く、集落跡・宮殿跡・官衙跡・祭祀遺跡の順である。いずれにしても、寺院や官衙からの検出例が多いことは、庶民階級の日常食器などではなかったことを物語っているかのようである。石川県内では、加賀市高尾廃寺跡・小松市古府しのまち遺跡・松任市三浦遺跡・七尾市能登国分寺跡からの出土が伝えられており、本遺跡を加え五例にし過ぎない。能登では国分寺跡築地（南東隅）付近から出土したものと二例だけである。



さて、緑釉陶片を出土した建造物跡は、その規模やプランからみて倉庫様のものと考えられる。しかし、調査面積が限られており、本遺構1棟分の外にどのような建築物が存在したか確認しておらず、今後の発掘調査に期待するしかないのである。今次調査において、若干の製塩土器片を採集しており、至近距離に製塩遺跡の存在することは疑えない。大野木地内には他にもう1ヶ所の土器製塩遺跡が確認されており(1図2)、古くからの製塩業地であったといえよう。

本遺跡で検出された倉庫様建造物跡や緑釉陶片を直ちに製塩と結びつけるのは、C類能登式製塩土器が7世紀頃に編年されることからいっても、いかにも早計でもある。しかし、この地域が古代製塩地域であり、生産された塩の流通過程の中で、製品の集約・配分や生産体制の管理を行うための機構は整えられていたものと考えられるから、海産諸製品の流通管理者がこの地に居を構えていなかったとはいきれない。小範囲の発掘所見では想定の域を出るものではないが、本遺跡は、製塩を含む水産業に関する何らかの管理機構の一端を示している可能性の濃いことを指摘しておくにとどめておきたい。

## 参考文献

- 「彩釉陶器製作技法の伝播」 榎崎 彰一 名古屋大学文学部研究論集X L I V 史学15  
「加賀三浦遺跡の研究」 石川考古学研究会  
「陶邑古窯址群 I」 平安学園考古学クラブ  
「近世における能登国分寺址について——寛延三年国分村書上をめぐる——」 桜井憲弘 七尾の地方史  
「能登半島における土器製塩」 橋本澄夫 日本考古学協会昭和47年度大会研究発表要旨



遺跡遠景（南より）



遺跡遠景（北より、人のいる地点）



調査前（西より、遺跡は中央部）



調査区域（西より）



掘立柱建物（南より）



掘立柱建物（東より）



掘立柱建物（西より）



掘立柱建物（西より）



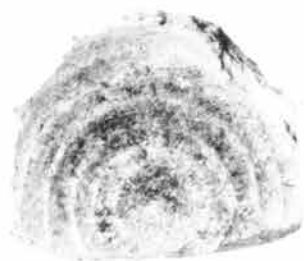
縄文式土器出土状態



調査風景



江泊小学生見学



須惠器



緑釉陶片



製塩土器(底部)

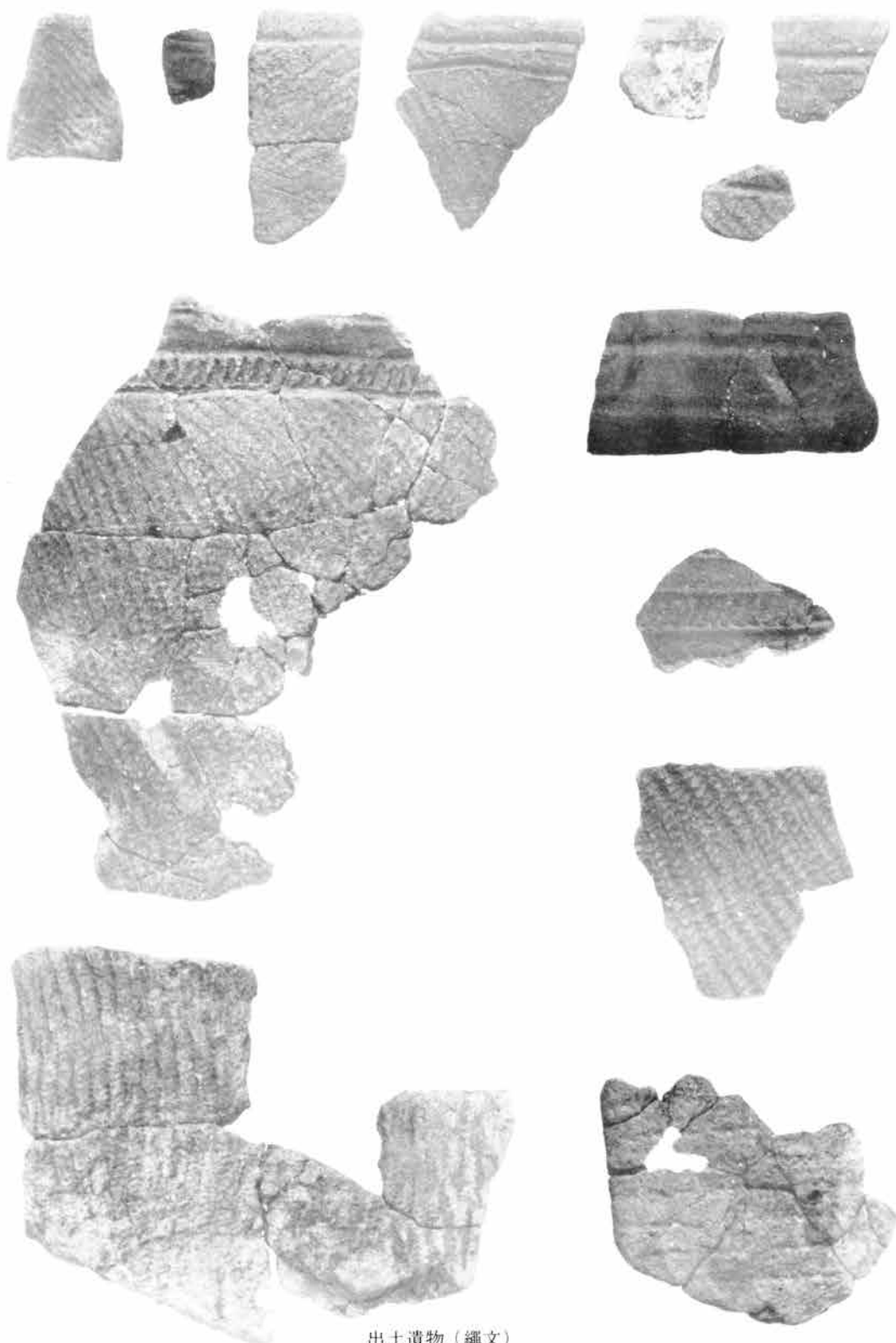


青磁



弥生式土器

出土遺物



出土遺物（繩文）



七尾市大野木タキシロ遺跡

印 刷 昭和49年 3 月15日

発 行 昭和49年 3 月25日

発 行 所 石川県教育委員会

印 刷 所 中川大正印刷(株)